平成 28 年度大学図書館職員長期研修

日時：2016 年 7 月 11 日＠筑波大学春日エリア

担当講師：津崎良典（tsuzaki.yoshinori.gn@u.tsukuba.ac.jp）

担当科目：大学図書館に期待するもの

人文学徒が大学図書館に期待する二、三の事柄

I. théâtre de la nature et de l'art と *Atlas Universalis*

① 「博物館（ミュージアム）／美術館」、「図書館（ライブラリー）」、「文書館（アーカイブズ）」というトリプティック（MLA）の解体あるいは「**博情館**」の実現 のために

【参考資料１】

博物館は、情報機関であります。それぞれの分野に応じて、ひろく情報を収集し、蓄積し、変換し、創造し、伝達する。そういう機関であります。そして、蓄積された膨大な情報のなかから、最新の、正確な知識を市民に提供する、これが博物館の仕事であります。その知識は、人間の過去、あるいは現在に関するものであるかもしれません。しかし、そもそもなんのために知識・情報を提供するのかといえば、市民に、未来の人間生活の構築するために、あやまりのない世界像を形成する材料を提供することだ、といってよろしいかとおもいます（梅棹忠夫『メディアとしての博物館』、平凡社、1987 年、17 頁）。

【参考資料２】

博物館は意味の収蔵庫であるといった。意味とは、情報である。博物館に収蔵されている品物は、物質として収蔵されているのではない。情報として収蔵されているのである。博物館は、情報の収蔵庫である。博物館がその展示を公開し、市民の観覧に供するというのは、その収蔵された情報を市民に伝達するということである。博物館は、ひとつの情報伝達装置である。/博物館に収蔵されているものは、物質ではなく情報である。だからこそ圧縮が可能なのである。ひとつの世界、ひとつの文明の全容をさえ、ひとつの博物館におさめこむことができる。その世界、その文明の全体をそのまま収蔵し保存することなど、できるわけがない。それは、情報としてのみ可能なのである。/博物館が孫悟空のヒョウタンでありうるのは、相手が情報だからである。あるいは、存在を情報化するからである。博物館の観覧者たちは、博物館において情報の伝達をうける。そし

て、その伝達された情報にもとづいて、ひとつの世界の全体像を再現し、再構築するのである（同上書、41-42 頁）。

【参考資料３】

職業集団としての歴史家のあいだには、また、文字史料を特権化し、生（なま）の史料――というのは多くの場合手書きの古文書を意味しているのだが――と向かい合いその繙読に没入している者でなければ歴史家ではないという気持ちが、これまた根強くある。古文書館で姿を見かけなくなったらおしまいだとよく言われるのも、歴史研究がもっぱら文書館、つまりは文書史料と結びつくかたちでしか考えられてこなかった重い遺産のように思われる。同じく歴史の研究者でありながら、思想家の著作や文学作品、絵画や建造物などの芸術作品に立脚することが多い思想史・文学史・美術史などの研究者、また、文字化されていない口頭伝承や、民具のような「もの」を基本的な素材とする民俗史家などが、本来の歴史家とは別種の存在とみなされがちなのもそのためである（二宮宏之「歴史の作法」、『二宮宏之著作集』第一巻所収、岩波書店、2011 年、112-113 頁）。

② G・W・ライプニッツ[1]（1646 年-1716 年）が「王子の教育に関する書簡」（1685 年 ?）のなかで夢想する**「自然と人工の劇場」**[2]と**『普遍アトラス』**の実現のために（人工物か自然物か、オリジナルか複製か、文字資料か映像資料かそれ以外か、紙媒体かそれ以外か、網羅性追求型か否か、陳列室かそれ以外か、等々）

【参考資料４】

人工（art）と**自然**（nature）に関する陳列室を利用できたら宜しいと思います。それは若き王子に事物そのものの**標本**か少なくとも**模型**をお見せするためです。この陳列室（キャビネ）とは、いわば自然と人工の劇場（Theatre de la Nature et de l'Art）でありましょう。解剖学上の模型は〔すでに〕作られていて、人間の身体や幾つかの部位、例えば眼球などの機構をかなり正確に模しております。私は、木製で可動式の部品からなる要塞の模型一式を見たことがあります。また、ままごと遊びのための小型の銀器もたくさん見たこと

[1] ドイツ・ライプツィヒ出身の哲学者。田中泰三「ライプニッツの図書館活動」（酒井潔ほか編『ライプニッツ読本』所収、法政大学出版局、2012 年）によれば、「「図書館普遍主義の思想」の先駆けをなしたフランスの図書館学者ガブリエル・ノーデ（一六〇〇年-五三）が図書館人ライプニッツに大きな影響を与えた」（135 頁）。

[2] この表現は、ライプニッツの専売特許ではない。それは、マインツ大学などで医師として活躍していたヨハン・ヨアヒム・ベッヒャー（Johann Joachim Becher, 1635-1682）が 1668 年に出版した言語習得のための教科書『教授法（*Methodus didactica*）』に既出である。ライプニッツはこれを出版の翌年に読んだらしい。その要約と講評を書き残しているからだ。ライプニッツによれば「自然と人工の劇場」とは、ルネサンスからバロックにかけて王侯貴族がこぞって建造した珍品収集館（クンストカマー）・美術蒐集室やそこに展示される品々、動物の骨格標本などが展示される解剖学劇場（テアトルム・アナトミクム）といった実験室、薬草園や動物園、さらには、天文台、武器庫、鉱山で使用されるような大型機械の貯蔵庫などから構成される集合体のことである。したがって「劇場」という表現を芝居の上演される小屋と解してはならない。それはむしろ事物なり概念なりを人々に感覚的に学習させるための空間のことなのである。

があります（津崎良典ほか訳、『ライプニッツ著作集』第二期第二巻、工作舎、2016年）。

【参考資料５】

私は、もし存在するなら諸技芸に関する図鑑を強く推奨します。すなわちつねづね構想してきたように、範型の大きい銅板に〔いろいろ〕指示して彫らせるのです。それは、『アトラス』のうちに収められ、或る一つの学問や技芸や職業を**全望**できるようにしたものです。じっさいに私はそのような**図版**を目にしたことがありますし、私自身も幾つか持っております。例えば一枚の図版に**あらゆる種類**の要塞が描かれたものです。さらに艦船やガレー船を描いたものも持っており、そこには航海術関連の用語を使った**説明文**も付されています（同上書）。

③　C・レヴィ＝ストロース『みる　きく　よむ』（竹内信夫訳、みすず書房、2005 年）の一歩先へ、あるいは「資料」という概念の拡張さらには「テクスト」という概念の再考へ

【参考資料６】

近未来の先端技術には、“におい”をデジタルアーカイブすることも可能かもしれない。忘れられない匂い、忘れられない香気もあるだろう。〔中略〕デジタルアーカイブは“知”だけでなく、五感を呼び覚ます機能も担うのだろう（影山幸一「忘れ得ぬ日本列島――国立デジタルアーカイブセンター創設にむけて」、岡本真ほか編『デジタル・アーカイブとは何か――理論と実践』所収、勉誠出版、2015 年、24 頁）。

II.　texte、textile、texture から contexte、intertextualité、dé-contextualisation へ

①　資料の三つの c：content（中身、内容）[3]、carrier（素材、モノ）[4]、そして context（文脈、環境）

【参考資料７】

「テクスト」の語源であるラテン語には「織り物」の意味があったが、構造主義以降の用法では「言葉によって語られたもの」全般を指し、さらに解釈学的社会学の潮流では、

[3] 図書館学や情報学で「データ」（音声データ、動画データ、静止画データ、テキストデータ）と呼称されているものに相当する。なお、本講義では「テクスト」と換言する。

[4] 「フォーマット」と換言してもよい。ディスカバリ・サービス「Summon」を使用した筑波大学附属図書館の検索サービス「Tulips Search」では、「フォーマット」として「CD、Filmstrip、Newpaper Article、アーカイブ資料、ウェブ資料、コンピュータファイル、スライド、データセット、テクニカルレポート、ニュースレター、パンフレット、プレゼンテーション、マイクロフィルム、マイクロフォーム、レポート、映像資料、画像、会議録、学位論文、楽譜、業界誌、研究論文、雑誌、雑誌/電子ジャーナル、雑誌記事、雑誌論文、参照、市場調査、詩、写真、手稿、手稿譜、出版物、書評、章、新聞、新聞記事、図書/電子書籍、図面･スケッチ、政府文書、地図、電子リソース、特許、美術品、標準、複写物、朗読、録音資料（音楽）」が挙げられている。

狭義の「言語」によらずとも「語られたもの」あるいは「生きられたもの」を指して使われるようになった。例えばテクストは、文字で記録された文献や文書（ドキュメント）のみでなく、通信販売のカタログやインターネット上に公開された「日記」、そして「映画」や「音楽」や「放送番組」なども指し示す。こうした広義の「言語」によって織り成された、自己充足的な輪郭を持つ社会的現象（あるいは作品）をテクストと呼ぶ場合、そのテクストの輪郭は常にすでに決定されているわけではないことに注意する必要がある（北川高嗣ほか編『情報学事典』、弘文堂、2002 年、619 頁）。

② 「一次資料」と「二次資料」の二項対立を再考する

- J・クリステヴァ『テクストとしての小説』（谷口勇訳、国文社、1985 年）等が提唱する**「間テクスト性」**、またはＧ・ジュネット『パランプセスト――第二次の文学』（和泉涼一訳、水声社、1995 年）が提唱する**「パランプセスト」**とは何か
- パランプセストあるいは再利用された羊皮紙：**「下層（イポ）テクスト」**（先行するテクスト）＋**「上層（イペル）テクスト」**（後続のテクスト）[5]
- オリジナルか複製かという問いは成立するか（作者を「無名存在、不在、空白」と規定するクリステヴァ、「作者の死」を宣告するＲ・バルト、「オリジナリティー」を否定し、「引用のシステム」からの再生産を説くＮ・フライ）
- 一次資料の網羅的な収集／メリハリの効いた二次資料の収集（「叢書」「シリーズ」「コレクション」）ということはどういう意味をもつか

【参考資料８】

相互テクスト性［とは］文学理論のコンテクストのなかで生まれた概念。文学作品を一つの閉域と見なす従来の文学研究を批判するものとして提起された。この概念を最初に用いたのはジュリア・クリステヴァである。彼女の簡潔な定義によれば、間テクスト性とは、「いかなるテクストもさまざまな引用のモザイクとして形成されており、すべてのテクストは他のテクストの吸収であり、変形にほかならない」というものである（『言葉、対話、小説』）。テクストは完足した一つの統一体ではなく、一義的な意味のまわりに組織されているのでもない。顕在的にであれ潜在的にであれ、テクストは他のテクストとの関係のうちにあり、その関係の網目においてはじめて可能になっているのである（木田元編『哲学キーワード事典』、新書館、2004 年、339 頁）。

[5] 例えば、ウェルギリウスの『アエネーイス』とジョイスの『ユリシーズ』は、いずれもホメロスの『オデュッセイア』に由来する上層テクストであり、『オデュッセイア』は『アエネーイス』と『ユリシーズ』の共通の下層テクストである。上層テクストには、文学作品の翻訳や翻案、脚色、改作、要約などが含まれ、さらには映画や演劇などもこの概念によって分析される。例えば、『カサブランカ』とそのパロディであるウッディ・アレンの『ボギー！俺も男だ』、『ハムレット』とその脇役を主人公にした『ローゼンクランツとギルデンスターンは死んだ』など。

③　「**文化資源**」と「**プレ文化資源**」[6]の二項対立を再考する → プレ文化資源は、どのような手段で、そしてどのような条件のもとで文化資源となるのか。種々のテクストはどのようにしてプレ文化資源となり、また、文化資源と認められるようになるのか。或る文化資源がどのような条件のもとで、そして、誰にとって支配的な地位を占め、その結果それ以外のものが少数派となったり、あるいは副次的なものとなったりするのか（資料の出所、評価、選別に関する問題）

【参考資料９】

どうやら日本の司書教育は、すべてこのやりかた、つまり、まず「図書資料」と「非図書資料」とにわけて、登録するのは「図書資料」だけというやりかたでおこなわれているようです。これでは、学術情報をとりあつかう研究機関の図書室の司書としては、まったく不十分です。司書教育に学術資料をとりあつかう専門コースをつくらなければ解決しないのかもしれません（梅棹忠夫『情報管理論』、岩波書店、1990 年、167 頁）。

④　「検索」とは何か

- 「資料」に関する「メタデータ」に何を含めるのか
- ジュネット『スイユ――テクストから書物へ』（和泉涼一訳、水声社、2001 年）が提唱する「**パラテクスト**」とは何か（テクストに付着し、その一部として認定可能な範囲までの「衣装」;「根本的に他律的で補助的な言説」）
- パラテクストには何が含まれるか（作者名、タイトル、献辞、エピグラフ、序文、章題、註釈と参考文献、あとがき、奥付（発行所、出版社、値段など）；自家解説、書評、書簡、インタビューなど） → 何を検索対象とするべきか真剣に再考することを迫られる！国会図書館のデータベースに目次データが入ったことだけで満足すべき？さらには、carrier と context についてはどのように処理する？
- パラテクストの空間的分類：「**ペリテクスト（書物の内部）**」（物質的な書物つまり「書物」という同一空間のなかで、テクストの周囲に付き纏うもの）/「**エピテクスト（書物の外部）**」（最初の書物には含まれず、その限りで書物の外部に位置するもの）
- パラテクストの時間的分類：「**先行的パラテクスト**」（例えば近刊予告情報）/「**遅延的パラテクスト**」（例えば、刊行後のインタビューや書評、研究論文） → 検索に diachronic（これまでどういうことが論じられ、自分は何を考えたか）と synchronic（自分はいま何を考えているのか、他人は何を考えているのか）の観点を導入することを迫られる！

[6] まだ「文化資源」として認識されていないもの。この術語は、古賀崇「デジタル・アーカイブの可能性と課題」（岡本真ほか編『デジタル・アーカイブとは何か――理論と実践』所収、勉誠出版、2015 年、51 頁）に学んだ。

- 変わらないもの＝保存データ、時々変化するもの＝表示機能・検索機能、積極的に変えていくもの＝デザイン[7]

- ディスカバリ・サービス（より精確には、図書館での購読・非購読の区別なく、世界中に存在するあらゆる content を検索対象とするウェブスケール・ディスカバリ）との連携；諸外国の MLA が保有するメタデータ、諸外国のデジタル・アーカイブ（Europeana など）との連携

⑤ 人文学徒（研究者と学生）の研究手法の枢要は、「資料」（研究対象であり学習対象である）の**文脈化**[8]と**脱-文脈化**である！あるいは、研究活動の方向性を匿名的かつ先行的に規定する「**前理解**」を反省することである！

【参考資料１０】

Let us consider Johannes Kepler: imagine him on a hill watching the dawn. With him is Tycho Brahe. Kepler regarded the sun as fixed: it was the earth that moved. But Tycho followed Ptolemy and Aristotle in this much at least: the earth was fixed and all other celestial bodies moved around it. *Do Kepler and Tycho see the same thing in the east at dawn ?* […] "Do Kepler and Tycho see the same thing in the east at dawn ?" is […] rather the beginning of an examination of the concepts of seeing and observation. […] theories and interpretations are 'there' in the seeing from the outset. […] the microscopist sees coelenterate mesoglea, his new student sees only a gooey, formless stuff. Tycho and Simplicius see a mobile sun, Kepler and Galileo see a static sun (Norwood R. Hanson, *Patterns of Discovery: An Inquiry into the Conceptual Foundations of Science*, Cambridge: Cambridge University Press, 1958, pp. 5-17).

【参考資料１１】

Seeing is not only the having of a visual experience; it is also the way in which the visual experience is had. […] If seeing different things involves having different knowledge and theories about *x*, then perhaps the sense in which they see the same thing involves their sharing knowledge and theories about *x*. […] There is a sense, then, in which seeing is a 'theory-laden' undertaking. Observation of *x* is shaped by prior knowledge of *x*. […] Seeing an object *x* is to see that it may behave in the ways we know *x*'s do behave: if the object's behaviour does not accord with we expect of *x*'s we may be blocked from seeing it as a straight-forward *x* any longer. Now we rarely see dolphin as fish, the earth as flat, […] (*ibid*., pp. 15-22).

---

[7] 前掲の古賀論文（57 頁）を参照のこと。

[8] 大学図書館を使用した学生の学習・研究支援の代表的かつ古典的なものに「課題図書（リザーブブック）制度」があるが、これは「「資料」の文脈化」の一環であるといえる。

【参考資料１２】

Hence it is evident that each interpretation is guided by a certain interest, by a certain putting of the question: What is my interest in interpreting the documents? Which question directs me to approach the text? It is evident that the questioning arises from a particular interest in the matter referred to, and therefore that a particular understanding of the matter is presupposed. I like to call this a pre-understanding (R. Bultmann, *History and Eschatology*, Edinburgh: Edinburgh University Press, 1957, p. 113).

【参考資料１３】

さまざまなタイプの痕跡を手がかりとしながら歴史家は過去を再構成しようとするわけだが、ここであらためて注意しておかなくてはならないのは、ある意味では無限に存在していると言ってよい人間活動の痕跡のなかである状況のなかである種の痕跡が注目されるところとなるのは、それらが単にこの世に存在しているからではないということである。考古史料にせよ民俗史料にせよ図像史料にせよ、それらの史料に刻まれている痕跡は、歴史家の問いがあって初めて歴史家の世界に呼び戻されるのである。歴史家の問いがなければ痕跡はその姿を現さない。さらに言えば、歴史家が問いかけなければ痕跡は答えてくれないのだ。同じ史料を眼の前においてもそこからなにを読み取れるかは、歴史家の技量や習熟もさることながら、史料に対し、いかなる問いを発しているかにかかわっているのである（二宮、同上書、129 頁）。

⑥　資料の「分類」と「配架」とは何か

- DDC でも NDC でもなく
- ライプニッツによる図書分類法（1 :神学; 2 :法学; 3 :医学; 4 :知識哲学; 5 :数学; 6 :物理学; 7 :言語学および文学; 8 :民衆史; 9 :文献史および書誌; 10 :叢書および雑録）
- フランスのグランゼコールの最高峰・エコール・ノルマル・シューペリウールの付属文系図書館（在パリ）が採用している図書分類法＝主題別（**B**:Bibliographie (et Beaux-Arts); **H**:Histoire**; L**:Littérature; **S**:Science; **T**:Théologie）と判型別の組み合わせ
- Ａ・ヴァールブルク（1866 年-1929 年）の「文化学図書館（Kulturwissenschaftliche Bibliothek）」あるいは『ムネモシュネ・アトラス』[9]、さらにはＡ・マルロー（1901 年-1976 年）の『空想美術館』 → 画像と画像の関係から新たなイメージを喚起する知的試み

[9] その全貌については、アビ・ヴァールブルク『ムネモシュネ・アトラス』（ありな書房、2012 年）を参照のこと。

III. interdisciplinarité から intersection へ

① 「司書」とは誰か

- クリエーターではなく、プロデューサーand/or エディターとして、さらには研究者とのコラボレーターとして
- 資料の集約（aggregation）、支援（facilitation）、分配（distribution）から、利用者の巻き込み（engagement）へ

② **「学際性」**[10]から**「領域交差」**へ[11]——なぜ大学のなかに図書館があるのか、なぜ図書館は大学のなかで最も特権的な場であるのか/ありうるのか/なければならないのか

【参考資料１４】

知のこの横断的な領域交差は、「学際性〔interdisciplinarité〕」と通称されているものに還元されるわけではない。学際性とは、それ自体すでにその境界線が特定されている共通の主題をさまざまな手段と補助的な方法をもって研究するために、既成の諸科学の代理人のあいだで計画された協力体制のことである。その限界そのもののうちにとどまることがどれほど必要だとしても、以上のように理解されたかぎりでの学際性は、これまでに前例のない問題構制を制定するのでも、新たな対象を考案するのでもない。それ自体としては、研究領域ならびに各領域に固有な手順と方法の構造とその認定された境界線を変更しようとはしないのだ。反対に、私たちは領域交差を仕掛け、これを展開していくことが求められていると思うのだが、この領域交差は、既成のものであるかぎりでの学問分野によって全般的に抑制されたり周縁化されたりしている——それは多くの場合、学問分野（ディシプリン）の影響力、正統性、有効性のためだが——もろもろの問題構制を、

[10] *Cf.*「学際性（interdisciplinarité）は、共通の課題や問題の解決に向けた複数のディシプリンの共同を指す。/ディシプリン（discipline）はラテン語の discere（学ぶ）から派生した語で、「学問分野、専門分野、学科」を意味し、いわば知識の部分や分枝を指す。学習には一定の規範が必要であるため、discipline には「規律、訓練」「生活規範、規則」の意味もあり、さらには「規範を逸脱した際の懲罰」の含意もある。ディシプリンは知識の秩序を整理する枠組みであり、一定の対象や主題、一連の方法論や組織的な探求様式、合理的な認識や論証、妥当な価値関与などによって各ディシプリンは区別される。一定の概念や方法、価値、規範に立脚した伝統的なディシプリンに対して、一九六〇年代後半から、複数のディシプリンの共同、すなわち、「学際性（interdisciplinarité）」が重視されるようになる。たとえば、環境問題のような複雑な課題については、自然現象の解明だけで済まされず、人間の経済活動や社会構造の解明、文明観の再考、人間と自然の共生に向けた倫理観の創出などが必要となり、自然・社会・人文科学の連携が要請される。/本書〔デリダ『哲学への権利２』〕では、研究教育において当時ますます重要性を増していた学際性を考慮しながら、デリダが interscience（学際的研究）や intersection（領域交差）といった表現を用いて、哲学とそれ以外の学問分野の共同を別の仕方で考案しようとしている点に留意されたい」（デリダ『哲学への権利２』、津崎良典ほか訳、みすず書房、2015 年、444 頁）。

[11] 「領域交差」と「学際性」の相違については、西山雄二氏の論考「哲学への権利と制度への愛」（西山雄二編『人文学と制度』所収、未來社、2013 年）のうち 298 頁から 301 頁にかけても参照のこと。

言語活動（ランガージュ）によるもろもろの出来事を解放しようとするものでなければならないだろう（デリダ『哲学への権利２』、津崎良典ほか訳、みすず書房、2015 年、304 頁）。

③　「保存」と「展示（活用）」の二項対立を改めて考え直す → これとこれが繋がると面白い！という感覚の重要性

【参考資料１５】（出典：写真パネル展示「ムネモシュネ・アトラス――アビ・ヴァールブルクによるイメージの宇宙」（東京大学駒場キャンパス）関連 HP（http://mnemosyne-ut-blog.tumblr.com/）；2016 年 5 月 30 日参照）

『ムネモシュネ・アトラス』パネル 39：「「古代」の手本からボッティチェッリの神話画へ」